「使琉球録」の情報化

夫馬 進：京都大学文学部

計画研究「環東シナ海地域間交流史－中国福建を中心として」が取り組んだ研究課題、及びその研究成果については、すでに（第２部）において記述したので、ここでは使琉球録の情報化のみについて述べる。

１.「使琉球録」諸版本の所在情報

「使琉球録」はこれまでも琉球史研究の重要史料として知られてきた。しかし各種の使琉球録にどのような版本があり、それらがどこの図書館に所蔵されるのかについては、必ずしも充分な情報がなかった。同種の目録としてはわずかに『那覇市史　資料編〔冊封使録関係資料〕』第１巻３（那覇市役所、１９７７年）付載の「冊封使関係書目一覧表」及び沖縄県立博物館編『冊封使－中国皇帝の使者－』（沖縄県立博物館友の会、１９８９年）付載の「冊封使関係主要資料目録」があっただけである。これらは沖縄県における所在情報を伝えるだけで、沖縄以外で研究する者にとっては不便であった。そこで当研究を始めるにあたって、まず国内の主要漢籍図書館に所蔵されている使琉球録の目録を作成することにした。ここで主要図書館として選んだのは京都大学人文科学研究所、京都大学文学部・附属図書館等、東京大学東洋文化研究所、内閣文庫、東洋文庫、国立国会図書館とした。これはすでに出版されている『京都大学人文科学研究所漢籍目録』（京都大学人文科学研究所、１９７９年）などをベースにし、史部、地理類、外紀等に記される「使琉球録」に関係する部分をコンピュータに入力した。さらに琉球へ使いした明人・清人の名前をもとに、彼らの他の著作をも各種漢籍目録によって調査し、これをも入力した。

これによって使琉球録の各種版本を正確に把握することができたのみならず、従来琉球史の史料としては知られていなかった重要な史料をも発見することができた。また当研究を進める上での基礎となった。

２.「使琉球録」全文データテキストファイルの作成

「使琉球録」が『歴代宝案』と並ぶ琉球史研究にとっての重要史料であることに鑑み、いくつかのものをテキストファイルとした。この作業は琉球（沖縄）史料の歴史情報化という問題に止まらず、今後膨大な漢文文献を重要なものから順次テキストファイル化してゆくための、一つの試行でもあった。これは研究分担者である岩井茂樹の発案とその全面的な指導によった。

全文データテキストファイルとしたものは以下のものである。

陳侃『使琉球録』一巻　　台湾文献叢刊第二八七種所収

蕭崇業『使琉球録』二巻付『皇華唱和詩』一巻　　〃

夏子陽『使琉球録』二巻　　〃
徐葆光『中山伝信録』六巻　　台湾文献叢刊第三〇六種所収

まず、すでに活字印刷されているテキストをもとに、これをＯＣＲで読みとることから始めた。

これに先立って、どの活字本テキストを選ぶかを調査したところ、台湾銀行経済研究室編印の台湾文献叢刊におさめられる『使琉球録』『中山伝信録』が最も良いとわかった。岩井がこのテキストと原鈔本もしくは原刊本と一字一字対照したところ、極めて正確であるとわかったのである。

次にＯＣＲで実際に読み込ませたところ、旧漢字をなかなか正確に読みとってくれなかった。一字一字「学習」させていったところ、認識率は 80～90％ほどに向上したが、百文字につき 10～20 字の読み誤りは避けられなかった。一部のテキストについては、これをＯＣＲの画面上で訂正して行った。ディスプレイ上の作業であることに加えて、作業量が多いため相当量の校正漏れが発生することになった。

一方多くのテキストについては、この段階でプリントアウトしたものを、原本と対照しながら校正した。校正にあたってはまずコンピュータ入力業者に委託してみたが、費用がかかるわりには十分に校正できなかった。これでははじめから入力するのと金銭および労力の点であまりかわらなかった。このためＯＣＲで読みとったテキストを、アルバイト学生に校正してもらうことにした。ここでは京都大学大学院文学研究科に留学中の中国人留学生及び韓国人留学生に委託した。彼らは極めて高い水準で校正してくれた。この校正作業を２回重ねた。

外字の処理にあたっては「琉球・沖縄の対外関係史」（金城班）で行っている『清代中琉関係档案案選編・続編・三編』の全文データテキストファイル作成の作業とジョイントした。ここで用いたのはいわゆる「赤嶺コード」である。赤嶺コードとは金城班に属する赤嶺守が作成したコードであって、半角アルファベットと半角洋数字を組み合わせたもので、コードは２バイトのデータ長である。これは、漢字・かな文字のデータ長と一致している。これはとりあえず今回のプロジェクト内で用いるために開発されたものである。まず赤嶺氏が『清代中流関係档案案選編・続編・三編』をもとにコードを作成したが、「使琉球録」にある外字数はこの史料全体の分量に比べて極めて多く、その一字一字にコードをつけてもらうのにあたって赤嶺氏に多くの負担をかけた。いわゆる「異体字」をどう処理したらよいのかも大きな問題であった。この問題の処理についても赤嶺守氏に大きな負担をかけた。

また、蕭崇業『使琉球録』については、赤嶺コードを使わず、花園大学国際禅文化研究所のウスル・アップ、クリスティアン・ウィッテアン両氏が開発した「IRIZ 漢字ベース」システムを利用し、ＳＭＧＬ（Standard Generalized Mark-up Language）の外部参照の規格に沿った缺字代替記号を入力した。この代替記号は、ＪＩＳに含まれない漢字を代替するもので、ＭＳ－Ｗｏｒｄ上のマクロによって、その漢字の字形をビットマップ画像によって表示・印刷することが可能である。なお各種使琉球録にある図表（系図）の処理は最後の問題として残った結果、この部分は一部省略することにした。この作業によってわずか４種ではあっても使琉球録の一語一語が検索できるようになった。先に記したようにこれまですでに活字化された漢字文献の数は膨大なものにのぼる。今後、これら活字化された漢文文献をもとにＯＣＲで読みとり、全文データテキストファイルにする一つの重要なステップになったことは疑いない。

３．「使琉球録集成」の作成

この作業は当重点領域研究が主要課題の一つとして設定した「琉球史料集成」の一環としてなされたものである。まず画像データとしてＣＤ－ＲＯＭに入れたものは、以下の４種である。ここに収録するに際しては、版本もしくは鈔本のうち最も良いものを選び、同じ版本の場合はより刷りが良いものを選んだ。所蔵機関についてもここに注記する。

(１)陳侃『使琉球録』一巻　覆明嘉靖刻本　国立北平図書館善本叢書第一所収　京都大学文学部蔵

(２)蕭崇業『使琉球録』二巻付『皇華唱和詩』　〔台北〕国立中央図書館　万暦七年序刊本影印明代史籍彙刊（台湾学生書局、１９６９）所収本　京都大学文学部蔵

(３)徐葆光『中山伝信録』六巻　康熙六十年長洲徐氏二友斎刊本　京都大学人文科学研究所蔵

(４)斉鯤『続琉球国志略』五巻首一巻　活字印本　京都大学人文科学研究所蔵

マイクロフィルム作成によるものは以下の通りである。

(５)張学礼『使琉球紀』一巻『中山紀略』一巻　説鈴前集所収本　京都大学附属図書館蔵

(６)汪楫『中山沿革志』二巻『使琉球雑録』五巻　康熙二十五年序刊本　京都大学文学部蔵

(７)周煌『琉球国志略』十六巻　広雅書局刊武英殿聚珍版書史部所収本　京都大学人文科学研究所蔵

(８)李鼎元『使琉球記』六巻　嘉慶７年序師竹斎刊本　京都大学人文科学研究所

(９)趙新『続琉球国志略』二巻　還硯斎全集所収　光緒８年刊本　京都大学附属図書館蔵

以上９種は全て公開できるものであるが、諸般の事情によって困難なものもある。

(１)郭汝霖『重編使琉球録』二巻　アメリカ議会図書館（Library of Congress）原蔵のため。

(２)夏子陽『使琉球録』二巻　この書のテキストとしては、北京図書館蔵『会稽夏氏宗譜』所収本が最も良いと判断したが、これが北京図書館原蔵にかかるため。

(３)胡靖『杜天使冊封琉球真記奇観』一巻　ハワイ大学（ホーレー文庫）蔵のため。

(４)胡靖『琉球記』一巻『中山詩集』一巻　北京図書館蔵のため。

「使琉球録」諸本の全てを集成することができなかったのは残念であるが、これによって琉球史（日本史）研究者、中国史研究者を含めていかなる研究者であれ、原本ないしはよりよい版本により容易にアクセスできるようになったと考える。なお上記各種の使琉球録についてさらに詳細な書誌情報あるいは解説を必要とされるのであれば、当計画研究班の研究報告書『使琉球録解題及び研究』を参照されたい。また報告書の目次は、本総括班研究成果報告書 第２部 21.06 の当研究班の項に掲げてある。